

[研究ノート]

# 教育文法から見たシテイル（シテイタ）

— 畠（2002）に基づいて —

清 水 淳

## The Japanese Tense System from the Point of View of Japanese Pedagogical Grammar

— Based on the Work of Hata (2002) —

Jun Shimizu

### Abstract

Hata (2002) contradicts the conventional grammar explanation in which the pattern ‘verb + *teiru*’ is the aspectual form to indicate ‘progressive aspect’ and ‘resultative aspect’, and claims that it is the tense form to indicate ‘present tense’. The present article, on the basis of the discussion by Hata (*ibid.*), aims at reconsidering the grammar commentary with respect to ‘verb + *teiru*’ in Japanese language teaching. I would like to claim that the assertion is valid from the point of view of Japanese pedagogical grammar.

### 1. はじめに

初級文法項目の中でシテイル（シテイタ）は使用頻度の高い文法形式と<sup>1)</sup>言える。そのため、日本語教育の現場においては習得に向けた効果的な指導が期待されている。しかしながら、許（2005）、市川（2010）、江田（2013）、山口（2014）などの先行研究においては、シテイルの習得の困難性が示され、教育現場での指導不足が指摘されている。このような状況の中、シテイルの文法説明について、畠（2002）ではすでに従来のシテイルの指導のあり方に疑問が示されている。畠（*ibid.*）の論考は多岐に及ぶが、主要な主張

は以下の4点にまとめられる。

- ①習慣的行為を〈現在〉としてではなく、〈超時態〉として扱う。
- ②シテイルを独占的に〈現在〉を表すテンス形として教授する。
- ③その際、進行、結果、単なる状態など、アスペクト的意味の区別は問題にしない。
- ④過去形をシタとシテイタの2種とする。

そして、これらの主張を表にまとめ、教育文法の指導の観点から基本的なテンス構造が提案されている。

表 1

	変化動詞	状態動詞
超 時 態	スル	スル
未 来	スル	スル
現 在	シテイル	スル
過 去	シタ シテイタ	シタ

(畠 *ibid.* : 56)

表 1 の提示に至るまでの畠 (*ibid.*) の論考は、今後の文法教育に有益な示唆となると考えられる。以下、①～④について、順次、考察していく。

2. 習慣的行為を〈現在〉としてではなく、〈超時態〉として扱うことについて

畠 (*ibid.* : 51) は、「太陽は東から昇る」「ボタンを押すと、水が出てくる」「犬も歩けば棒にあたる」などの一般的事実や真理だけでなく、「毎日、行きます」などの習慣的な行為も、基本的に時間と関係のない動きであり〈超時態〉であるとしている。確かに、「あした、行きます」と「きのう、行きました」は個別的で具体的な（アクチュアルな）出来事であり、「毎日、行きます」は繰り返され、抽象化した行為を述べようとするもので、厳密な意味での〈現在〉ではない。よって、これを「今、食べています」が表

す、具体的場面性のある〈現在〉と同じように扱うことは避けるべきである。具体的場面性のある〈現在〉はシテイルが義務的であるのに対し、場面性を欠いた繰り返し行為の〈現在〉の場合はスルで表される（シテイルでもよいが義務的ではない）。

ただし、習慣的行為を純粋な〈超時態〉に一括りにすることについては注意が必要である。「太陽は東から昇る」などの〈超時態〉は、〈未来〉〈現在〉〈過去〉の区別を必要としない脱テンス化した事柄である。一方、「毎日、行きます」の場合、現在の習慣的行為のみならず、「（夏休みになったら、プールに）、毎日、行きます」や「（去年の夏休み、プールに）毎日、行きました」とも言え、〈未来〉も〈過去〉も表す。これら〈習慣〉は、純粋な意味での超時態とは言えず、具体的出来事と〈超時態〉との中間にあるものであり、テンスの対立を持つのである<sup>2)</sup>。

表2

	意味	テンス対立	テンス	形式
脱場面化 した事柄	真理／ 一般的事実	なし	—	スル
	習慣	あり	未来	スル
			現在	スル
			過去	シタ

よって、教授上留意すべきは、純粋な〈超時態〉と〈習慣〉を分けて考え、その形式的特徴をしっかりと指導することである。また、それをもって〈現在〉の意味を導入したことにはならないという認識を教師側が持つことも重要であろう。

### 3. シテイルを独占的に〈現在〉を表すテンス形として

#### 教授することについて

畠 (*ibid.*: 52) は、「田中さんは本を読んでいる」「田中さんは結婚している」などの文は明らかに現在の動き、状態を表すため、テンスは〈現在〉

だと述べている。これは、日本語動詞の大部分を占める変化動詞（非状態動詞）でアクチュアルな〈現在〉に言及する場合、スルではなくシテイルを用いるということによる。畠（*ibid.*: 56）は、シテイルの基本的な働きを「運動過程の動きを止めて動きを状態として認識する」というアスペクト的機能で説明してはいるものの、実際には〈現在〉を独占的に表していることから、これをテンスとして捉えるべきだと主張している。

この考え方に立つ場合、現行の一般的な提出方法、つまり、初級前半の中期頃にテ形を導入し、そのテ形に接続する一つの文型としてシテイルを導入する方法は見直されることになる。新たな提出方法としては、初級のかなり早い段階で、アクチュアルな事柄のテンス体系として、スル〈未来〉、シテイル〈現在〉、シタ〈過去〉を順次、あるいはほぼ同時に導入することが考えられよう。その際、少し複雑な現在形の作り方として、スルをシテイルに変換するルールを学ぶ（必ずしもこの段階でテ形という概念を持ち込む必要はない）。このようにすると当然、初級初期の学習項目が増えることになるが、全体を通して見た場合に学習項目の総量が増えるわけではないので問題はないように思われる。近年では、「最初に学んだことほど印象深くよく覚えられる」、「述語の大部分を占める動詞の活用をまず土台として作り上げるのが最も効率的である」（海老原 2015）といった観点から、初級の最初の段階で活用を一通り教えてしまう方法も提案されていることもあり、畠（*ibid.*）の提案は、今後の検討に値するものと考えられる。

この場合のメリットは大きい。まず、これにより、従来型のデメリット、つまり、初級の早い段階で〈現在〉のことに言及できる文法形式が学べないという問題が解決できると考えられる。また、畠（*ibid.*: 57-58）は、シテイルは初級の中期以降に〈結果〉ないし〈進行〉を表す一つの表現形式として導入されるため、学生は必ずしもシテイルの重要性に気づかず、その積極使用を避ける傾向があると指摘している。確かに、シテイルは、テ形が導入された後に、進行、結果状態などを表すテ形接続の一文型として提出されていくのが一般的である。それは、テクダサイ、シテシマウなど

の文型と横並びのやり方であり、あたかもシテイルとこれらの文型が同じ重みを持っているかのような印象を受ける。しかし、実際には、シテイルとテクダサイ、シテシマウは決して横並びに、排他的に存在しているのではない。日本語動詞文の述部は、文末に付加するモダリティ表現を除けば、スル、シタ、シテイル、シテイタのいずれかで終止し、テクダサイ、シテシマウを用いるにしても、学習者は常にスルを使うべきかシテイルを使うべきかを選択しなければならないのである。以上のことから、シテイルをテンス体系を形成する現在形として、その重要性を理解させるべきとの畠 (*ibid.*) の主張は、今後の文法教育には必要であると考ええる。

#### 4. 進行、結果、単なる状態など、アスペクト的意味の区別は 問題にしないことについて

シテイルを〈現在〉を表すテンス形であるとする場合、現行の日本語教育におけるシテイルの諸用法の扱いが問題となる。畠 (*ibid.*: 12-14 章) は結論として、「手紙を書いている」「大学で英語を教えている」「お金が落ちている」「結婚している」「青い目をしている」などは、結局、すべて〈現在の状態〉を表すため、これらを厳密に区別することは教育上あまり意味を持たないとしている。これも、教育文法の上では非常に重要な示唆である。日本語教科書における進行と結果の文法解説は、動詞分類に基づくものがほとんどである。つまり、継続動詞のシテイルは進行、瞬間（変化）動詞<sup>3)</sup>のシテイルは結果を表すという方法である。しかし、どれを継続動詞、どれを瞬間（変化）動詞とするかは非常に曖昧であり、この区別を学習者に求めることは避けたい。より機能的な文法説明としては、動詞分類を強調するのではなく、発話時に（動作の進行にしる結果の残存にしる）何らかの状態が観察できればシテイルを使うとすればよいと考えられる。

#### 5. 過去形をシタとシテイタの2種とすること

シテイルを〈現在〉を表すテンス形と考えた場合、シテイタも〈過去〉

のテンス形の一つと考えることは自然である。表1の変化動詞の「過去」にシタとシテイタがあるが、この捉え方も学習者にシテイタの重要性を理解させるには有効だと考えられる。畠 (*ibid.*: 16 章) は、①持続態が進行を表す動詞、②結果を表す動詞の場合、③単なる状態を表す動詞とに分けて考え、「シタとシテイタの対立ではシテイタの表す状態の性質が問題になる」としつつ、結論としては、これらの違いを厳密に考える必要はなく、シタは動きを、シテイタは状態を表すと説明すれば十分であると述べている。シテイルの場合に、進行、結果などの用法は厳密に区別する必要はないとしたわけであるから、シテイタについても当然の結論と言える。

しかし、これについては、慎重に検討する必要があると考えられる。許 (2005)、江田 (2013) などの研究が示すように「シテイルの過去がシテイタ」という教え方では、十分にシテイタの価値が理解されず、誤用や非用の解決にはならない。シタとシテイタを理解しやすい方法でその存在価値を教える必要がある。また、畠 (*ibid.*: 53) では、「明日は雨が降っている」という文が不自然で、「明日は何をしていますか」は自然なことから、「シテイルは未来を表現できないとまでは言えないにしてもかなり強い制約があるようである」とし、〈未来〉はスル (一部シテイル) で表されると述べている。しかしながら、筆者は、過去にシタ、シテイタの2種を認めるのであれば、〈未来〉でもスル、シテイルの2種を認めるべきだと考える。この理由を、タクシスの説明と共に以下で説明する。

## 6. タクシスの観点からの説明

〈過去〉にシタ、シテイタの2種、〈未来〉にスルとシテイルの2種を認めることについて、タクシスの観点から説明することが有効ではないかと考えられる。〈現在〉とは異なり、〈過去〉〈未来〉は、実際に観察可能な事柄を述べるのではなく、すでに終了した事柄またはこれから起こる事柄を思考の中で処理をして言語化する。このような場合、動きか状態かといったことは、実のところ学習者には理解されにくいように考えられる。一

方で、タクシスとは、物事の意味的な説明ではなく、出来事の「時間的順序性」(工藤 1995) のことである。具体的には、スル(シタ)は継起性を、シテイル(シテイタ)は同時性を表す。物事の意味的な説明ではなく、時間的な順序という考え方のほうが理解しやすいと考えられる。

- (1) ? ①家に帰った時、②母は夕飯の準備をした。

〈継起性〉 ①→②

- (2) ○ ①家に帰った時、②母は夕飯の準備をしていた。

〈同時性〉 ①

②

- (3) ? ①(私が)家に帰る時には②母は寝そうです。

〈継起性〉 ①→②

- (4) ○ ①(私が)家に帰る時には②母は寝ているそうです。

〈同時性〉 ①

②

〈過去〉と〈未来〉の事柄に言及する場合、時間的な順序性は問題にせず、過去(または未来)に何かがあった(ある)のだと言いたい時にシタ(スル)を使用するということになる。そして、何か複数の事柄を述べたい時には時間的順序性を考慮せねばならず、同時性を表す場合にシテイタ(シテイル)が必要になるということになる。また、シテイタ(シテイル)を単独で使用する場合にもあり得る。その場合には何らかの基準時点と同時であることが含意されていると考える。

- (5) 昨日、『我輩は猫である』を読んだ。

- (6) 昨日、『我輩は猫である』を読んでいた。 (畠 *ibid.*: 65)

畠 (*ibid.*: 66) は、両者の違いはほとんどないとしているが、(6)では、「昨日、『我輩は猫である』を読んでいた。その時、感想文を書こうと思立った。」のように、やはり他の何らかの出来事が想定されているように感じる。そう考えると、(5)(6)の違いは明瞭であると考えられる。

## 7. おわりに

本稿では、畠 (*ibid.*) の論考を参考に、教育文法の観点からシテイル (シテイタ) の文法説明のあり方を検討した。表1を発展させ、以下を日本語の基本的なテンス体系として提示する。

表3

	テンス	変化動詞	状態動詞
一般的 (真理・法則)	—	スル	
抽象的 (習慣・属性)	未 来	スル	
	現 在	スル	
	過 去	シタ	
具体的 (出来事)	未 来	スル シテイル	スル
	現 在	シテイル	スル
	過 去	シタ シテイタ	シタ

本稿で述べた内容は、具体的に現場で活用できるような方法論を提示したとは言えない。特に、シテイルを〈現在〉として早期に導入した場合、テ形という概念をどの段階で独立させ、どのようにテ形に接続する文型 (テモイイ、テシマウ等) を提出していくのかといった問題については考察に及んでいない。これについては今後の課題とたい。

本稿は2016年9月にインドネシア (バリ) で開催された日本語教育国際研究大会 (ICJLE2016) において発表した「教育文法から見たシテイル (シテイタ) のとらえ方 — 畠 (2002) に基づいて」の内容に加筆・修正したものである。当日、貴重なお意見をくださった方々に謝意を表したい。

### 注

- 1) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における初級文法項目の出現頻度を調査した森 (2011: 65) では、シテイルの出現頻度が高いことが明らかにされている。
- 2) 工藤 (1995: 25-27) に詳しい。
- 3) この場合の「変化動詞」は、畠 (*ibid.*) における変化動詞ではなく、限界性のない動詞 (動作動詞) と対立する限界性のある動詞のことである。



参考文献

- 市川保子（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク
- 江田すみれ（2013）『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト——異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法』くろしお出版
- 海老原峰子（2015）『日本語教師が知らない動詞活用の教え方』現代人文社
- 許夏珮（2005）『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 畠弘己（2002）「外国人のための日本語文法研究（1）——テンスとしてのシテイル」『千葉大学留学生センター紀要』第8号、pp.49-74
- 森篤嗣（2011）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』コアデータにおける初級文法項目の出現頻度」、庵功雄・森篤嗣（編）（2011）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、pp.57-78、ひつじ書房
- 山口薫（2014）「外国人留学生の作文に現れるテンス・アスペクト形式の分析」『南山大学国際教育センター紀要』第14号、pp.25-39